

気分障害に焦点づけた学生メンタルヘルス検診の 有用性について

七里 佳代・澁谷 雅子・村山 賢一

新潟大学保健管理センター

The Usefulness About the Student Mental Health Examination Focused on Mood Disorders

Kayo SHICHIRI, Masako SHIBUYA and Kenichi MURAYAMA

Health Administration Center, Niigata University

要 旨

新潟大学保健管理センターでは、平成 18 年度より、学生定期健康診断の際に、全学部の学生と大学院生約 13,000 名を対象に、任意で「新潟大学メンタルヘルス検診」を実施している。DSM の気分障害の診断基準に基づいて作成された＜メンタルヘルス検診票＞による一次検診を実施した後、要精査者をメール通知で呼び出し、＜臨床面接＞による二次検診において DSM-IV-TR に基づく診断を行っている。メンタルヘルス検診 7 年間の検診実態と精神保健活動との連関をまとめ、その有用性を検証する。

メンタルヘルス検診結果から、7 年間の受検者数、有所見者数等を調査した。また、精神保健相談の記録や、学務情報等を基に、検診導入 7 年前の平成 11 年度から導入 7 年後の平成 24 年度までの精神保健相談の利用件数、自殺者等のデータを収集した。

一次検診受検者数は、検診を開始した平成 18 年度には 5,622 名 (42.9%) であったが、検診開始 7 年後の平成 24 年度には 9,992 名 (79.1%) に増加した。一次検診受検者のうち、二次検診の臨床面接を経て精神疾患を認められた者は 54 ~ 131 名 (1.0 ~ 2.3%) で推移した。平成 24 年度の有所見者は 103 名であり、適応障害 (50.5%)、気分障害 (31.1%)、不安障害 (5.8%) の順に多かった。平成 24 年度の二次検診受検者は 119 名であり、事後措置の結果は要治療が 30.3%、要指導が 61.3%、問題なしが 8.4% であった。検診導入以降、精神保健相談の利用件数は約 2.1 倍に増加し、精神面の医療機関紹介件数は約 1.8 倍に増加した。検診導入以前の 7 年間の平均自殺率 (10 万対) は、20 歳代の全国平均とほぼ同率の 18.4 人であったが、平成 18 年度導入以降の 7 年間では、20 歳代の全国平均が 23 人に増加したのに対し、その 62.5% の 14.4 人に低下した。

新潟大学学生メンタルヘルス検診は導入後 7 年間で、学生の約 8 割が受検するまでに定着し、精神疾患の早期発見・早期治療に有用であり、精神保健相談件数や精神医療機関紹介件数の増加につながっていた。自殺率は検診導入以前の 7 年間に比べ、検診導入以降の 7 年間では低下が見られた。今後の課題としては、二次検診受検率の上昇と統合失調症等の精神病圏の抽出の検討などが考えられた。

キーワード：学生メンタルヘルス検診、気分障害、DSM 診断、自己記入式質問紙、二次検診

Reprint requests to: Kayo SHICHIRI, Ph.D.
Health Administration Center, Niigata University,
8050 Ikarashi2 - no - cho, Nishi - Ku,
Niigata 950 - 2181, Japan.

別刷請求先：〒950-2181 新潟市西区五十嵐 2 の町 8050
新潟大学保健管理センター 七里 佳代

緒 言

大学生のメンタルヘルス管理の現場では従来UPI (University Personality Inventory) が多く用いられてきた¹⁾。

新潟大学保健管理センターでは、平成17年度の「大学生における気分障害の実態調査」²⁾を経て、平成18年度より、学生定期健康診断の際に、全学部の学生と大学院生約13,000名を対象に、任意で気分障害に焦点づけた「新潟大学メンタルヘルス検診」^{3) 4)}を実施している。DSMの気分障害の診断基準に基づいて作成された自己記入式質問紙である「メンタルヘルス検診票」による一次検診を実施した後、要精査者をメール通知で呼び出し、「臨床面接」による二次検診においてDSM-IV-TR⁵⁾に基づく診断を行っている。気分障害に焦点づけた学生メンタルヘルス検診7年間の検診実態と精神保健活動との連関をまとめ、その有用性を検証する。

対象と方法

1. 対象

対象は新潟大学メンタルヘルス検診を受検した平成18年度から平成24年度までの過去7年間の学生である。

2. 新潟大学メンタルヘルス検診

1) 新潟大学メンタルヘルス検診の流れ

新潟大学メンタルヘルス検診は、学生定期健康診断の際に任意で行い、うつ状態と躁状態を検出する精神保健面の検査である。一次検診では自己記入式質問紙を学生定期健康診断の際に事前配布して実施し、二次検診では一次検診で要精査となった学生をメール通知で呼び出して問診を行う。その際にDSM診断を行うと同時に、二次検診事後措置として、要治療・要指導・問題なしの三分の判定を行い、助言指導はもちろんのこと、必要がある者には医療機関への紹介や保健管理センターでのフォローにつなげる。

2) 自己記入式質問紙の内容

一次検診で使用する新潟大学メンタルヘルス検診票は、42項目からなる自己記入式質問紙である。その内容はIDDL⁶⁾とMDQ⁷⁾によって構成されている。IDDL (Inventory to Diagnosis Depression, Lifetime version IDDL; Zimmerman et al., 1987) はDSM-IV-TR大うつ病性障害を診断するために必要な項目を含んだ質問紙であり、MDQ (Mood Disorders Questionnaire; Hirschfeld et al., 2000) はDSM-IV-TR双極性障害を診断するために作成された質問紙である。記入前一年間の有病率をみるために、両尺度を一部改変して用いている⁸⁾。

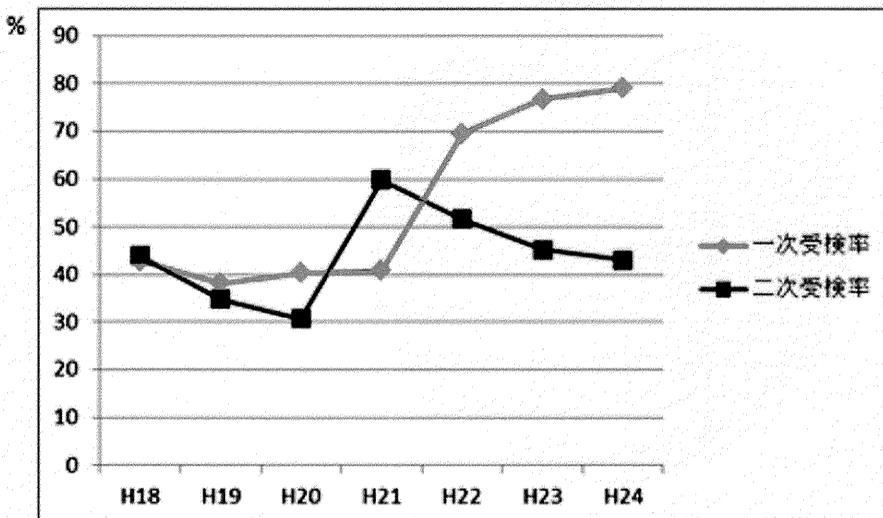


図1 メンタルヘルス検診受検率の推移

3. 方法

メンタルヘルス検診結果から、7年間の受検者数、有所見者数等を調査した。また、精神保健相談の記録や、学務情報等を基に、検診導入7年前の平成11年度から導入7年後の平成24年度までの精神保健相談の利用件数、自殺者等のデータを収集して比較、検討した。

結 果

1. 検診7年間の実態

一次検診受検者数は、検診を開始した平成18年度には5,622名(42.9%)であったが、検診開始7年後の平成24年度には9,992名(79.1%)に増加した(図1)。一次検診受検者のうち、二次検診の臨床面接を経て精神疾患を認めた者は54

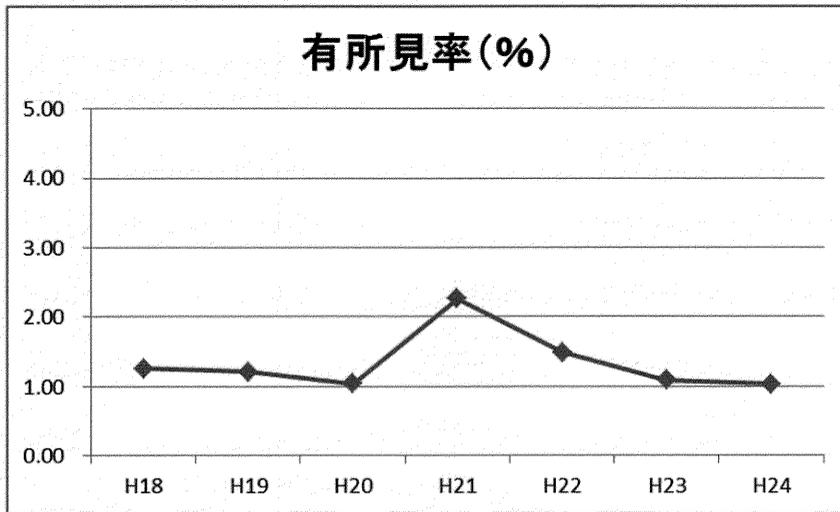


図2 一次検診受検者に占める有所見者の割合

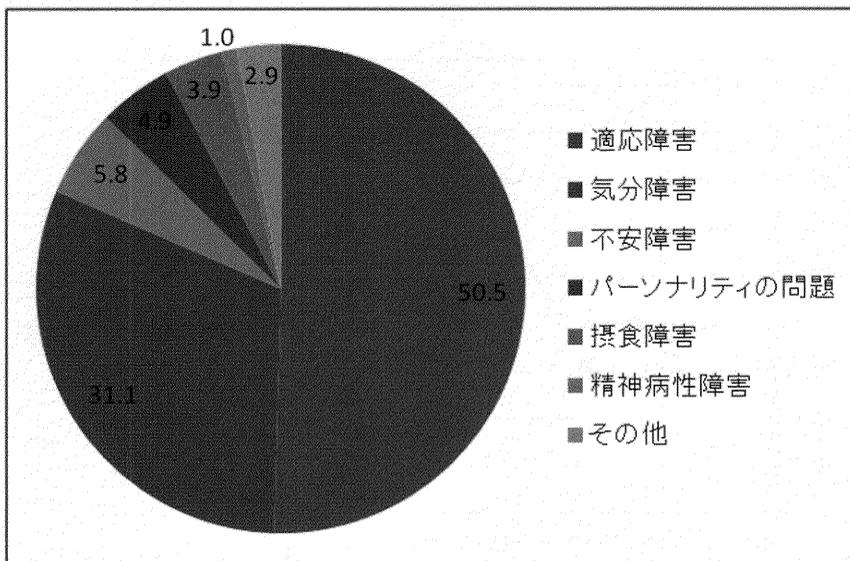


図3 有所見者の診断内訳 (H24年度)

～131名（1.0～2.3％）で推移した（図2）。平成24年度の有所見者は103名であり、適応障害（50.5％）、気分障害（31.1％）、不安障害（5.8％）の順に多かった（図3）。平成24年度の二次検診受検者は119名であり、事後措置の結果は要治療が30.3％、要指導が61.3％、問題なしが8.4％で

あった（図4）。検診導入以降、精神保健相談の利用件数は約2.1倍に増加し（図5）、精神面の医療機関紹介件数は約1.8倍に増加した（図6）。検診導入以前の7年間の平均自殺率（10万対）は、20歳代の全国平均とほぼ同率の18.4人であったが、平成18年度導入以降の7年間では、20歳代の全

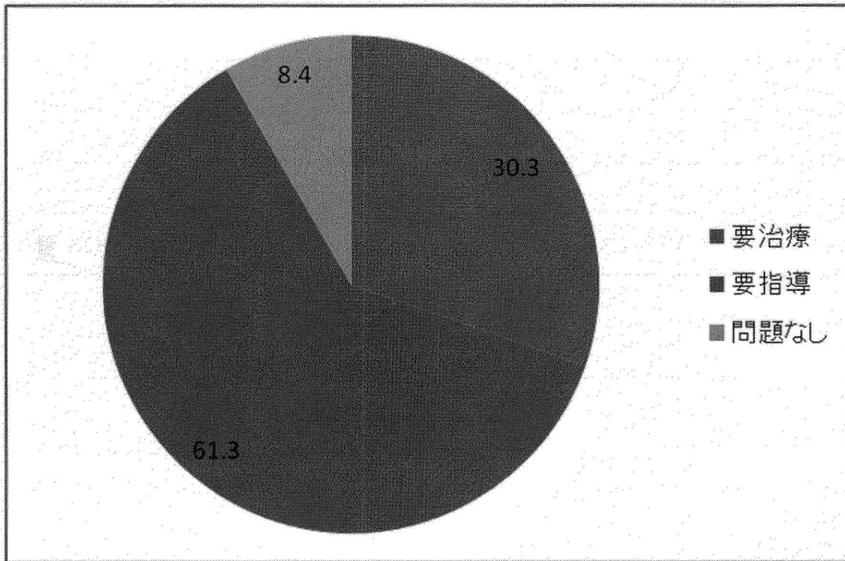


図4 二次検診事後措置 (H24年度)

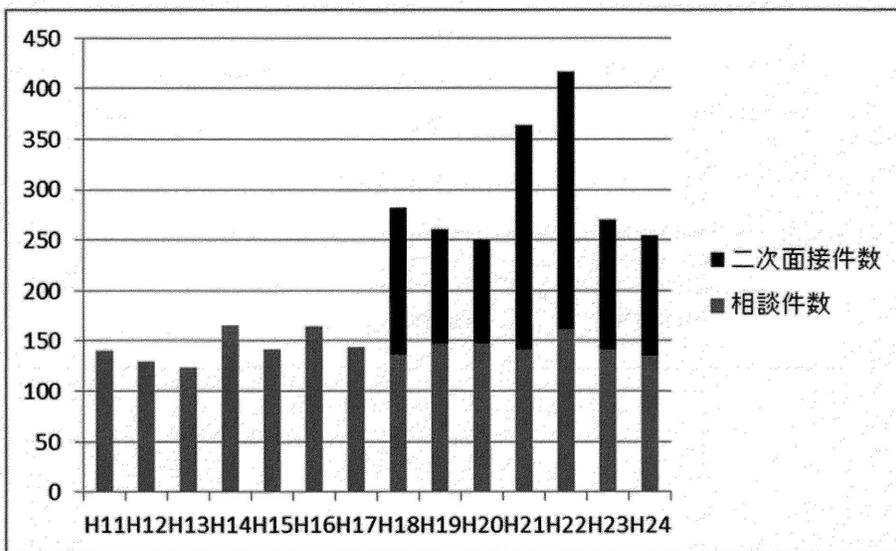


図5 精神保健相談利用件数 (実人数)

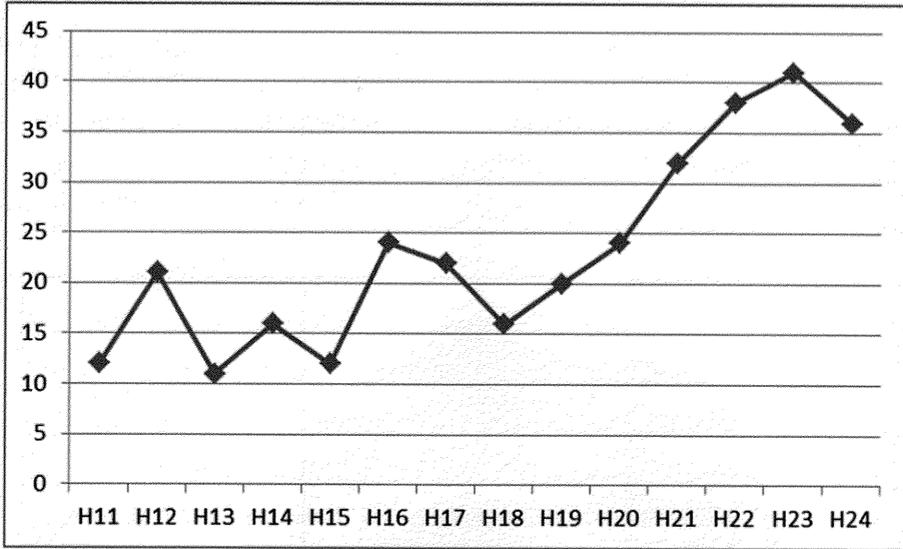


図6 精神面の医療機関紹介件数

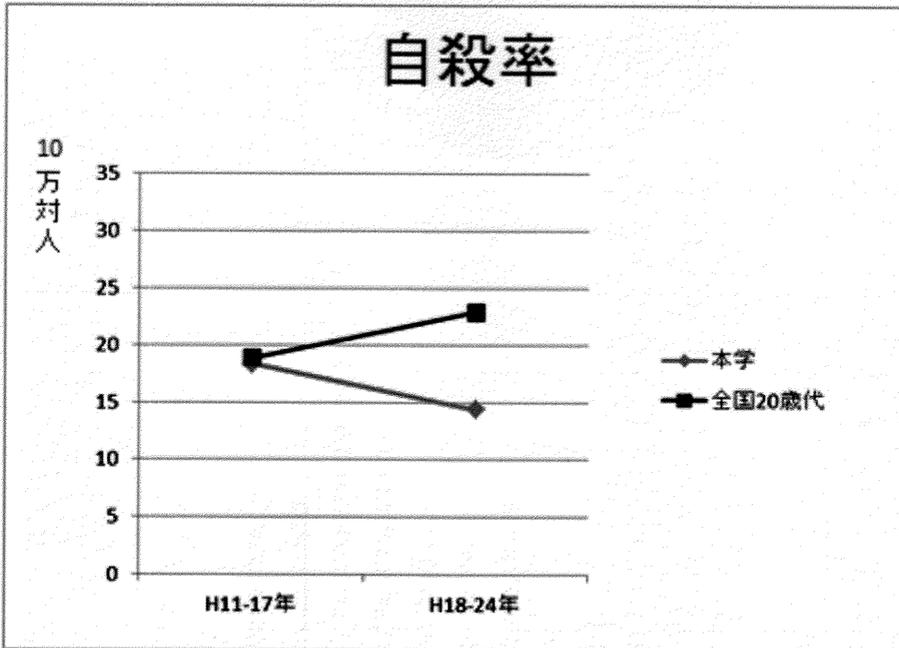


図7 平均自殺率(10万対)の変化

国平均が23人に増加したのに対し、その62.5%の14.4人に低下した(図7)。

2. 事例

平成24年度の二次検診受検者の事例を提示する(いずれも個人が特定されないよう事実に修正)

が加えてある)。

1) 事例A

1年女子：幼少時より両親は不仲で、父はD.V.であった。母はいつも傷だらけで、自身も体罰を受けて育った。家庭環境の深刻さに耐えきれず、高3の時にドアノブに紐をかけて自殺を図ったが、途中で紐が切れて未遂に終わった。二次検診後、保健管理センターでフォローを続け、学業を遂行している。

2) 事例B

3年男子：元来生真面目な性格であった。運動部の主将に選ばれ、アルバイトもこなしながら頑張っていた。二次検診時には思考制止が認められ、希死念慮も出現していた。医療機関を紹介し、親元での療養を勧めた。半年間の休学後、復学し、卒業を目指している。

考 察

新潟大学学生メンタルヘルス検診は導入後7年間で、学生の約8割が受検するまでに定着し、精神疾患の早期発見・早期治療に有用であった。また精神保健相談件数や精神医療機関紹介件数の増加にもつながっていた。自殺率は検診導入以前の7年間に比べ、検診導入以降の7年間では低下が見られた。さらに事例にみられるように、二次検診での専門家による臨床的関与が奏功している可能性が考えられた。気分障害は他の精神疾患に比べて発症率が高く⁹⁾¹⁰⁾、また提示した事例にみられるように自殺行動との関連性の強さが指摘されており¹¹⁾、気分障害に焦点づけて検診をデザインすることは検診の有用性を高めると考えられた。今後の課題としては、二次検診受検率が停滞していることに対する呼び出し方法の工夫と共に、統合失調症等の精神病圏や大学生に増加がみられる発達障害の抽出の検討などがあげられる。

結 論

新潟大学学生メンタルヘルス検診は導入後7年間で、学生の約8割が受検するまでに定着し、精

神疾患の早期発見・早期治療に有用であり、精神保健相談件数や精神医療機関紹介件数の増加につながっていた。自殺率は検診導入以前の7年間に比べ、検診導入以降の7年間では低下が見られた。気分障害は他の精神疾患に比べて発症率が高く、また自殺行動との関連性の強さが指摘されており、気分障害に焦点づけて検診をデザインすることは検診の有用性を高めていた。

謝 辞

新潟大学メンタルヘルス検診実施に尽力され、早逝された元新潟大学保健管理センター講師坂戸 薫先生に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 平山 皓：メンタルチェックとして用いるテストの種類，平山 皓/全国大学メンタルヘルス研究会UPI利用の手引き．創造出版，東京，p3，2011.
- 2) 坂戸 薫，村山賢一，七里佳代，青木定夫，上ノ山友子，野口愛子，今井百合子，鈴木芳樹：大学生における気分障害の実態調査（第1報）．CAMPUS HEALTH 43: 262, 2006.
- 3) 豊岡和彦，今井百合子，上ノ山友子，野口愛子，真島一郎，村山賢一，七里佳代，青木定夫，鈴木芳樹：メンタルヘルス検診の分析とその有用性について．CAMPUS HEALTH 46: 318-319, 2009.
- 4) 村山賢一，今井百合子，上ノ山友子，野口愛子，豊岡和彦，真島一郎，七里佳代，青木定夫，鈴木芳樹：メンタルヘルス検診の実施状況について．CAMPUS HEALTH 46: 320-321, 2009.
- 5) American Psychiatric Association. 高橋三郎他訳：DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル．医学書院，東京，2002.
- 6) Zimmerman M and Coryell W: The inventory to diagnose depression, lifetime version. *Acya Psychiatr Scand* 75: 495-499, 1987.
- 7) Hirschfeld RM, Williams JBW, Spitzer RL, Calabrese JR, Flynn L, Keck PE, Lewis L, McElroy SL, Post RM, Rappaport DJ, Russell JM, Sachs GS and Zajecka J: Development and Validation of a Screening Instrument for Bipolar

- Spectrum Disorder: The Mood Disorder Questionnaire. *Am J Psychiatry* 157: 1873 - 1875, 2000.
- 8) 上原 徹, 佐藤哲哉, 坂戸 薫, 佐藤 聡: 日本語版 Inventory to Diagnose Depression Lifetime version (IDDL) の信頼性と妥当性の検討—自己記入式質問紙によるうつ病生涯既往歴調査について—. 季刊 精神科診断学 6: 73 - 81, 1995.
- 9) 染矢俊幸: 一般臨床医のためのうつ病診療エッセンシャルズ. メディカルレビュー社, 東京, pp8 - 9, 2014.
- 10) 阿部隆明: 未熟型うつ病と双極スペクトラム. 金剛出版, 東京, pp275 - 276, 2011.
- 11) Sadock BJ, Sadock VA. 井上令一他監訳: カプラン臨床精神医学テキスト. 第2版, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京, pp987 - 988, 2004.

(平成26年8月26日受付)
